
ただいま死神参りますッ！

亜紀内 司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただいま死神参りますッ！

【Nコード】

N8054X

【作者名】

亜紀内 司

【あらすじ】

異形が跋扈する世界。14歳の少女キリーは母が他界し、生きる術を失ってしまった為に銃を片手に王都・メチュリルで行われる国家自然対策室の“死神”の試験を受け、旅に出る。その道中、仲間と裏切られた《元》山賊に出会い、彼と行動を共にすることに。占い師に、魔術師、いろいろな人間と出会いながら5日後の試験に向けて努力をする。そして見事合格し“死神”には成れたものの仲間らは皆、一癖も二癖もある者ばかりで——？その上、自分と組むことになった16歳の少年は——。

最初の仲間（前書き）

実際の団体、人物、場所など全て架空のものです。

最初の仲間

旅に出て早1ヶ月。

流石に意識が朦朧としてくる。

「——はぁ……」

やっと出た声も酷く掠れていて生気が無く、自分でも驚くばかりだ。

——金も、水も、食料も。

とうにそこを尽きている。

どこかに財布を掏れそうな奴がいなか辺りを見渡すも、ここは森の中だ。

流石に人気はない。

さて、どうしようか…。

確か持ち物の中にナイフはあったよなあ。

そんな不吉な事を考えていたその時、

——人気の無い森の中で、人の足音がした。

それは、彼女にとって……キリー・バーウルにとって、希望の光となったということは言うまでもない。

.....

キリー・バーウルは先月14になったばかりの少女だ。
彼女が今、何故山の中を一人で歩いているのかはちゃんとした理由がある。

14歳の誕生日の6日前、とうとう母も流行病に倒れ、他界してしまったのだ。

彼女が住んでいた村は、有能な医者もなく罹ったら最期——
そんな村だった。

母が最期に彼女に言った言葉は「生きなさい」「強くおなりなさい」
元々、父親が事故死していた彼女にとって母が唯一の家族であった。
村に住む人々は、皆、彼女を引き取れる余裕は無く、彼女に「旅に出てみては？」と提案した。

まだ14にもなっていない少女に向かって「旅に出ては？」と無責任な事を言う村人も村人だが「おお！それいい！！」と言った彼女も彼女だ。

普通は母が亡くなった地だ。
未練や離れたくない気持ちがあってもいいだろう。
それを無責任すぎる村人の提案にのつたのだ。

彼女曰く

「強くなれって母さんに言われたし！」

……らしい。

まったく持つて男勝りな性格だ。

ついでに無責任な発言をした村人は、他の村人に「流石にあればない」と責め立てられてキリーに18日分の食料と水、すこしばかりの銀を渡した。

そして彼女は14歳の誕生日の明け方、村人に送られて村を出発した。

――母の形見であるピアスを付けて。

.....
* * * * *
* * * * *

人の気配がした時、しめた！と思った。

ここ3日間、仲間に見捨てられてから、何も口していないシャーウル・ケイトはこれを逃す訳には行かない、と歩調を速めた。

ここは森の中。

迷った旅人かなにかだろう。

そう思いながら気配がした方に進んでいく。

——いた。

薄汚いローブのせいで、顔や体格は見えないがとりあえずこんな所まで来るのだ。女、子供ではないだろう。

幸運な事にかなり弱っているらしく歩調が鈍い……ではなく止まっている。

——さてどう近づこうか——。

旅人なら普通に声を掛けるのが一番。
そう判断し、普通に近づく。

まあ彼の普通は『山賊』としての普通なのだが。

「おい」

旅人に声を掛ける。

薄汚いローブの擦れる音が微かにする。

「お前、持っているものを全て出せ」

唯一持っていたナイフを突きつける。

すると旅人はため息と共にこちらを向いた。

「ありゃー…山賊様かよ…。参ったな。こりゃ——」

「掏れないじゃん」

その言葉と同時に薄汚いローブが宙を舞う。

ドスン、といかにも重そうな音がした時、もう既に銃一丁の口が山賊に向けてある。

「残念だったね。山賊さん」

「?!」

シャーウルは予想していなかった事態に焦る。
一つは人選を間違えた事、そしてもう一つは

「——女じゃん」

まさかこんな所に自分よりも年下に見える…しかも少女がいるとは思ってもみなかった。

「…女で悪かったなこの野郎」

少々言葉使いが荒いようだが。

「形勢逆転っ！お前の持つてるもの全部出せ」
少女が銃を突きつけながら偉そうな口調で言う。

「……………降参。俺、なんも持ってねえ」

嘘だが。

「へえ…？嘘付くんだ…？」

ばれているらしい。

このまま睨めっこしても時間の無駄…か。

「はあ…まさかこんな小娘一人に盗られるとは」
投げやりにそう言つと、昔、貴族の家からパクった牛側の巾着袋から金24枚に銀13枚、銅38枚を取り出す。

「はい。どーぞ。勇ましすぎる少女さん」
一瞬で盗られた。

「ったくよお…そういうお前は何も持ってねえのか？」
とりあえず愚痴ってみる。

「ないさ」

即答。

「じゃあ飯は？」

「10日前くらいに尽きた。今は森の草食べてる」
これも即答。

「…風呂は？」

「めんどくさい」

女としてどうかと思った。

というかコイツ、よく生きてんな
そんなことを考えていると

「困ったな…」

少女がボソリと言った。

「なんだ、俺の金にケチつけんのか」

こいつ一発殴りてえ…。

「違う。町へ行かないと金は使えない」

「町つてす……………」

すぐそこが王都じゃねえか。

そう言おうと思ったが、やめた。
気付いたからだ。

「なあ、もしかしてお前、町の場所とか知らない？」
「地図無いしな」

正直な娘だ。

「じゃあ、俺が町まで案内してやる。その代わり銀6枚、銅12枚の報酬。どうだ」

少女は一瞬迷ったようだが本当に一瞬だった。

「分かった」

.....
* * * * *
.....
* * * * *

「いやあー、俺は断るのかと思った」

からからと笑いながらシャーウルは少女と歩調を並べる。

「私の目的は王都だからな。あとどれくらいだ？」

チラリと横目でシャーウルを見る。

「あと30分くらいで着くさ」

「近いな」

これなら雇わなくても良かったのでは？と内心思った少女だった。

「そういえばお前、名前なんて言うんだ。あと年！」

シャーウルが一番気になっていたことを訊いてみる。

「私はキリー・バーウルという。先月14になった」

「14?!」

シャーウルは改めてこの少女を見る。

確かに見た目は14くらいだが、流石に14の娘がこんな薄汚れるまでの旅をするはずが無いと思っていたシャーウルは自分の予想が次々と外れていく事に苛立った。

「そういうお前は？」

まあ聞くだろうな。

「俺はシャーウル。あー…シャーウル・ケイトな。16」

いかにも人の良さそうな笑みを浮かべる。

「ふーん…そういうええつとシャーウルさん？」

「シャーウルで良いって」

いいの？という目を向けられる。

無言で頷いて見せた。

「シャーウルはさ、なんで山賊なのに一人？…というか山賊だよな？その格好」

キリーがシャーウルをじつと見る。

「ああ。俺な、もと山賊なんだ」

「もと？」

「そう。3日前ある貴族の屋敷に入ったんだがな、俺がヘマして捕まっちまってさ。俺が全部、基地の事とか吐いちまうと思ったのか、あいつら俺を見捨ててどっか行っちまったんだぜ。いやあ…参った参った」

あの日のことはもうしょうがないと思っているが。

ただ、俺はそんなに信用ならない奴なのか。

そう思いもしたが。

「……ふーん…山賊にもいろいろあるんだ」

キリーは急に神妙な顔になる。

こういう空気は嫌いだ。

その時、丁度王都の門が見えた。

「おいキリー。王都が見えてきたぞ」

「本当かつ?!」

キリーが目を輝かせる。

——といってもフードに丁度隠れていてシャーウルからは見えな
いのだが。

「さて…と」

はあとため息をつく。

「こっからが本番だぜ」

にやりとシャーウルが笑う。

「…?」

キリーには彼の言葉の意味が理解できない。

「はあ…キリー分かってないなあ…。門をくぐるって事は…どうい
う事だ?」

シャーウルが意味深に笑う。

「んー…えつと…あ!」

ポン、と手を叩く。

「身分証明書を門番に見せる!…ん?」

そこでキリーがゆっくりとシャーウルに視線を向ける。

「シャーウルは…もと山賊…身分証明書とか持っていない?!」

まさか!という顔をする。

もちろんフードに丁度隠れていてシャーウルからは見えないのだが。

「う」名答」

へへん、と自慢げに笑う。

「自慢すんなつ！…はあ…これは強行突破しかないな…」
ペシン、と自らの身長よりも遥かに高い位置にある頭を叩く。

「あー、悪い悪い」

叩かれた事は特に気にしていないのか、手をひらひらとさせる。

「完っ壁に反省してないな…」

「もちろん！」

即答された。

「俺が反省する奴に見えるか？」

逆に関き直られた。

「見えん」

スパッと切り捨てるキリ！。

「……ちよつとは迷ってくれても…」

「そんなことしてたら時間がなくなるつつつの」

完璧に理解されていた。

「で、どうやって通る？」

シャーウルが少し考えるそぶりを見せる。

「……とりあえず様子を見よう」

不幸か幸運か。

門の周りは雑木林だ。

隠れる場所ならたくさんある。

「じゃあいつちよ行きますか」

悪戯っぽい笑みと共に、シャーウルが呟いた。

.....

.....

「ふーん…門番6人とは…」

シャーウルが一人呟く。

「こりゃあ…骨が折れる」

まあ二人ならなんとかなるだろう。

そう思い、隣にいるはずの少女の方を向く。

「なあ、キリーどうや……—？」

いなくなってる…？

「——っ！あいつまさかつ！—！」

そのまさかだった。

門の前ではキリーが門番と話している。

「だからっ！身分証明書がない友達がいんだっつーの！」

「しつこいな、少年。ダメと言ったらダメだ！」

一番年配に見える門番がキリーに向かって怒鳴る。

流石にキリーも諦めるだろう。

見ていたシャーウルがそう思った。

だが…

「…だあれが少年だあ…」
ゆらあ、とキリーが動く。

——ドサリ。

ロープを地面に脱ぎ捨てる。

土煙と共に、怒りで震えながら拳を構える少女が、そこにはいた。

「なっ?!」

門番は相手が少女だった事に驚く。

「もう一回聞くぞ? 私は少年か?」

「…ダメなものはダメだ」

どこの頑固な親父だ…。

シャーウルはまったく場違いな事を考え始めている。

こうなってしまったキリーは多分、自分でも止められない。
そう判断した為だ。

「話の分かんねえおやじだなあっ!」

キリーの怒りが爆発した。

周りにいた門番が、異常に気付き、年配の門番を守ろうとするが…

——ドカッ——ドコッ——……

何秒かして、不吉な音が止まった。

「ぷっ……人間サンドウィッチ……」

見ていたシャーウルが自分の発した言葉に爆笑した。

見事に門番6人が段状に重なっていた。

シャーウルの言うとおり、まさに人間サンドウィッチだ。

「おーい、シャーウルー。行けるぞー」

キリーが元気に手を振っている。

くすり、と笑って一言。

「元気な子は嫌いじゃないさ」

そう独り言を洩らして、キリーの方へと向かった。

最初の仲間（後書き）

【続ける】ことって難しいなあって改めておもいました。

ようこそ、王都へ（前書き）

いきなり王都ですw

一回でもいいから出店とかいっぱいある、魔法の国へ行ってみたい

w
w

ようこそ、王都へ

門をくぐると、たくさんの店が並んでいる。

ここは王都。

揃えようと思えばなんでも揃う、この国の中心だ。

「なあなあ、あれはなんだ？」

キリーがシャーウルの服の袖を引っ張りながら問いかける。

彼女がもう片方の手で指差しているのは出店だった。

色とりどりのアクセサリーが見栄え良く飾られている。

「あーあれはな、出店と言って……」

そこまで言ってシャーウルは違和感を感じる。

あれ……？コイツ……ローブ何処だ……？

さっきまで持っていたはずだが。

「おい、キリーお前ローブは？」

シャーウルが問いかける。

出店を珍しそうに眺めていたキリーが自分の頭上にある顔に視線を向ける。

「あー……捨てた」

そうですか。

そういえばキリーがローブを着ていない所をまともに見たのは初めてだ。

菫色の瞳に赤銅色の髪。

ふむ——珍しい色だな。

——そういえば何故片方の耳だけピアスをしているんだ？

そんな疑問が頭をよぎったが、無くしたただけだろうと勝手に判断し、一瞬で忘れる。

「あ、そうだシャーウル」

出店を物欲しそうに見ていたキリーがいきなり声をかける。

「服、服買いたい」

分かんない訳ね。

さっきの門番のように、問題を起されてはいけないので、とりあえず付いていく事にした。

[illegible]

キリーの服選びをして、銀5枚を出費すると、シャーウルも山賊の格好をしていたので、新しい服を買い、着替える事にした。

「いやあー、新しい服はいいな」

薄着を何枚か重ねた服を選んだシャーウルは満足そうだ。

「……足がスースーする……」

キリーはというと、不満げだった。

元々彼女は、旅のしやすい格好……つまり長ズボンに長袖なのだ

が…をしていたので、この国で言う、男がする格好をしていたのだ。門番が“少年”と言ってしまったのも頷ける。

彼女曰く

「動きやすい」

「女って思われないからナメられない」

……らしい。

まあそんな格好をしていた彼女だが、今は短い丈のダボツとしたズボンにレギンス、長袖の上に丈がこれまた短い上着…といった格好だ。

まあホルスターだけは腰にしっかりと装着してあるのだが。

その中に装備してある銃をチラリと見てから急にシャーウルは思い出す。

「なあ、マジで今頃だけだよ、なんで王都に来たんだ？」

本当に今更な質問をしている。

すると、待つてましたとばかりにキリーが顔を輝かせた。

「私は“死神”になるためにここに来たんだ！」

「…は？」

一瞬彼女のいった言葉を理解できなかったのは言うまでもない。

「……？なんだ、そんなに驚く事か？」

不思議そうな顔をして、シャーウルの茶色の瞳を覗き込む。

「いや……14で死神ねえ…」

結局、日が暮れてきたので、二人とも宿を探す事に専念した。

「はぁ…死神の試験は5日後なんだけど…」

勉強しないとな…と呟きながらもしつかりと宿を探すキリ！。

「そういえば死神の試験ってどんなのだ？」

「…確か、クライムについての筆記試験と…実践だな。まあ実践あるのみ…だろうな」

「へえ…。俺も受けてみようかなあ」

死神といえば危険な職業だが、その代わりかなり給料が弾む。

「いいんじゃないか？あまり頭は使わないって聞いたぞ」

「じゃあやってみるさ」

からからと笑う。

「あ！宿、発見っ！」

民家と民家の間に挟まれる形で、ひっそりと建っていた。

「1泊で銀8枚か…まあ、安い方だな」

シャーウルが値段を見ながら呟く。

「そう、だな…じゃあここにするか…」

そういつて、宿の戸を押す。

——チリンッ

軽快な鈴の音と共に、戸が開いた。

「いらつしゃい」

いかにも人の良さそうな老婆が、二人を出迎えてくれた。

「えつと…お二人で？」

「私達は、友達です。一人部屋を2つ、用意してください」

珍しく敬語を使うキリーだった。

「はい。分かりました。何泊で？」

「5泊を予定しています」

「銀40枚。なければ金2枚ですよ」

チャリン、と金4枚が老婆に渡される。

「はい。確かに。——では、鍵を、どうぞ」

あらかじめ用意されていた鍵を手渡すと、一緒に、小さな紙が二人の手に15枚ずつ渡される。

「この町のレストランで使える食券ですよ。二人とも、若いのに大変そうだから、特別…ね」

優しい笑みを浮かべる老婆。

「ありがとうございますっ！」

キリーが満面の笑みを浮かべて受け取ったのをシャーウルは珍しそ
うに見ていた。

.....
* * * * *
* * * * *

木製の階段を上りながら、シャーウルがふと、思い出したように
キリーに言った。

「なあ、夕飯、どうする？」

「は？どうするって...？もちろんお前、一緒に行くだろう？」

へえ...そうなんだ...

まあそうなるだろうと内心思っていたもののここまでではっきり言わ
れると断ろうにも断れない。

「まあいいか...」

「ん？なにか言ったか？」

「いや、なんでも...」

諦めの表情をするシャーウルをキリーは不思議そうに見ていた。

と、その時。

「おい、キリー！」

前！

という前に、キリーはぶつかった。
前から降りてきた『人』に。

「?!」

階段の上だ。

キリーはバランスを崩し、落ちそうになる。

「キリー!!」

シャーウルが慌てて手を伸ばすが、間に合わない——!!

「っ、と」

「?????」

キリーは自分の身体がふわりと浮くを感じた。

上を見上げると、そこには顔があった。

「うおっ?!」

キリーが素っ頓狂な声を上げた。

「——大丈夫だったか？」

彼女を抱き止めていたのは、さっきまで彼女の目の前にいた…つまり彼女がぶつかった人、だった。

「あ、ああ。ありがとう、恩に着る」

さっきまで慌てていたがもう平然としているキリーであった。

「……………」

流石！俺が今まで女とは思えない女、第一位！

内心ではそう思ったが、もちろん口には出さない。

——出したら殺されそうだ。

「とりあえず、無事で良かった。じゃあ、俺は急ぐので
そういつてキリーを抱いていた少年は、ゆつくりと彼女を下ろした。

「お前のおかげで助かったぞ！ありがとう」

「いえ、では……………」

少年はそういうと、何事も無かったようにまた、階段を下りていった。

全身真っ黒なローブを羽織っていたため、顔は見えなかったものの、声からして男ということは確かだ。

しかも、キリーやシャーウルと同じくらいの。

「…それにしてもあいつ、素早かったなあー」

何気なく呟いて、キリーに「大丈夫だったか？」と聞く。

「おう！全然平気だぞ」

言葉通りピンピンしている。

「まあお前の心配するよりは、あの少年の心配するほうがいいか」
シャーウルはそういつてから、さっさと階段を上ってしまった。

ようこそ、王都へ（後書き）

誤字が多いなあ………

迷子にはご用心（前書き）

広い場所ほど迷うところはない……。

迷子にはご用心

とつくに夕日が沈み、月が辺りを優しく照らす。

王都の街は昼間の明るさとは違う、電灯の明かりが、辺りをキラキラと輝かせている。

その光景を珍しそうに、好奇心旺盛な少女…キリーは見ていた。そんな彼女の横顔を見ながら、「ああ俺もこんな時があつたなあ」と、シャーウルは思い出す。

あの時は本当に何もかもが美しく、華やかに感じた。

今となつては“思い出”になつてしまったが。

そつ、人の汚さ、欲望、因縁…を知つた今では。

そういえばキリーは14だと言つていたが、そういうモノの存在に気付いているのだろうか？

あまりにも能天気で、純粹で、それでいて真つ白な心を持った彼女は知らない方がいいような気がしないでもない。

——まあ俺にはカンケーないけどさ。

投げやりに呟いた後、もう一度キリーの方を向く…、が

「…あれ…？」

コツ——コツ——コツ——…

不意に足音がした。

コツ——コツ——…

確実にキリーに近づいてくる。

「…誰だ…？ シャーウル……じゃないな……」

足音のする方を…気配のする方を凝視しながら、自然と銃を構える。

コツ——コツ——コツ——ツ。

足音が、止まった。

暗い路地裏に、月光が差し込む。

「……………」

キリーの目の前に、白髪青年が立っていた。

「……………はじめまして。キリー・バーウル。私は、ソナル」

見る角度によつて、色が変わる不思議な瞳を細めながら、青年はキリーに名乗った。

「いろいろ言いたい事はあるけど、挨拶されたら必ず返せって母さんに言われてるからな」

キリーは青年にそう前置きすると

「はじめましてだ！ソナル。私の名前は、キリー・バーウル」

と、とてつもなく明るく言った。

なぜかとても嬉しそうな顔をしているが、きっと気のせいだ。

仲間が増えた！とはきっと思っていない。

「で、なんで私の名前を知ってる？」

にこやかな表情のまま、遠まわしに言わずにはっきりとソナルに聞くキリー！。

「では、私の職業について話しましょう」

ソウルはそう言つと、ゆっくりと歩き出した。

「…出口までご案内します」

迷子にはご用心（後書き）

不審者は疑いましょう（ ）

青年の正体（前書き）

キリーは無事に路地裏から出ることができるのか……？？？？？

青年の正体

しばらく二人は無言で路地裏を歩いていたが、ソナルが「あの…」と口を開いた。

「なんだ？ソナル」

歩調を少し緩めたキリーがソナルのほうを向く。

「では、私の職業について話をさせていただきます。よろしいですか？」

確認の為か、キリーの目を見る。

彼女は頷いてみせた。

「私はしがない占い師です。ああ…占いと言っても水晶で未来を視るのではなく、水を張った壺で、未来を視るんです」
そこで一旦話をきる。

「キリーは占いを見たことはありますか？」

少女が目を輝かせる。

「見てみたい！！！！！」

——青年はこの未来をとづくに視ていた。

.....**

.....**

その頃、シャーウルはキリーを必死に探していた。

王都で騒ぎを起したらただでは済まない、という理由でなのだがふと、何かに導かれるように路地裏に入ると、柄の悪い男達が6人ほど白目を剥いて泡を吹いて、倒れていた。その光景を見た瞬間、自分が笑っている事に気付くと、少々自分が嫌いになった。

確実にキリーはここを通った。

そう思うと少しは希望が見えてくる。

少年の予感は確信に変わった。

「……しつかしこつからどうするかなあ……」

意識のある者がシャーウル以外は誰もいない路地裏でぼそりと呟く。

流石路地裏と言うべきか……。シャーウルが今いる場所から伸びている道の数は7本。

勘で探して果たして朝までに見つかるかどうか……。

「行くしかねえな」

少年は決意を固めると、その場をあとにした。

[illegible]

『見てみたい！！』 キリーがそういうと、ソナルがクスリと笑った。

「…なんだよ？」

キリーが不審げに眉をひそめる。

「いえ…あまりにも…あまりにも私の見た未来、そのままだったの
で、面白いな、と」

ソナルがなにか含みがある言い方をした。

「…？そのままじゃない未来があるのか？」

不思議そうな顔をしながら自らを見る少女は本当に視たままの少女だった。

しかし、もしそうだとすると――

「貴方は、強いんですね」

そう呟く。

「お前は強くないのか？」

「いえ…体術方面で強いという意味ではありません」

そう言ってソナルは、自分の胸を拳で軽く叩く。

「“心”がお強いですね」

微笑みながら、そっと手を下ろす。

と、その時――

「キリーーーーーー！！！！いるかああ！！！！いるなら返事しろお
お！！！！いないならいないで返事しろおお！！！！」

という声が聞こえてきた。

「いなかったら返事とかできねえかなあっ！！！！！！」

少女は少年に見事にツッコんだ。

青年の正体（後書き）

キリーとシャーウルはツツコミもボケもできます（キリッ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8054x/>

ただいま死神参りますッ！

2011年11月16日12時12分発行